
椿

長月 夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

椿

【Nコード】

N3518E

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

小糠雨の街道沿いの旅籠に、行き倒れの女が運び込まれたのは、暮れ六つのことだった。

小糠雨の街道沿いの旅籠に、行き倒れの女が運び込まれたのは、暮れ六つのことだった。連れてきた男は、もう長くないと首を振りそのまま宿を発った。死にかけているのを放り出すわけにもいかず、納戸を片付け布団を敷き、末の娘に看病を任して、家の者はそれぞれ仕事に戻っていった。

娘は恐る恐る女の顔を覗き込む。年の頃なら27、8、粹筋の垢抜けた風貌だった。脂汗のにじむ額は青白く、眉根を寄せて目をつぶり、苦しげに開いた唇の紅が、凄絶に美しい。

娘は手拭で額を拭いてやった。そのうち、女がふと目を開く。

熱のせいですずをはったような目が、水の湧くかと思うほど潤み、娘は手拭を握り締めたまま見とれた。

「姐さん……」

女がかすれた声で呼びかけた。

「世話になるねえ、姐さん。手を煩わせて悪いけど、そんなに長くもちやしない」

そう言つと、一度深く息を吐き出した。

「……そんな事……」

「いや、いいのさ。自分の事は自分が一番わかっている。ヤマを踏む度、この命を捨ててきたんだ。さしたことじゃない。それでもさ、蝶よ花よと歌われたこのあたしがこんなところで死ぬのかねえ。まったく、一生なんて、終わりがこなきやわかりやしない。その上、終わりがきた時にはもう遅い」

女はそこで一度言葉を切った。

「少し休まれたら……」

と娘は言ったが、女はゆっくり頭を振った。

「もうすぐ長い休みが来るさ。それよりあんたみたいな器量よし最期を看取ってくれるなんて、あたしも少しは浮かばれる」

女は手を伸ばし、娘の手を握った。それは飛び上がるほど冷たく、命が消えかける様を娘に伝えた。

「姐さん、こんな女の言う事だけど、しっかり聞いておくんない。あんたは間違えちゃいけない、この先、鏡に、あたしの顔が浮かんだら、それは道を間違えてる。あたしみたいになっちゃいけない、落ちる先に底なんかありゃしない、いいかい、あんたしっかり胸に刻むんだよ……」

言い切るなり、女の瞳からすつと光が抜け、娘の手の中にぱたりとその腕が落ちた。

小糠雨の庭に、何かがぱたりと落ちた。女が立っていくと、それは椿の花だった。かつて旅籠の田舎娘であった面影はすっかり脱ぎ捨てた白いうなじへ、大きく抜いた襟元から、後れ毛がかかり一種墨絵の川を描いている。紅の椿を手に取り、まだ綺麗なものと呟きながら、櫛巻きの髪を直そうと鏡を覗いて、息を止めた。思わず握り潰した椿の花の、花芯の黄色が手にこびりつき、どんなに擦っても落ちはしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3518e/>

椿

2011年2月3日02時55分発行